

子どもへの理解

(二)

黒田成子

前月は子どもを理解するためには、子どものありのままの姿を記録する自然的観察法によることが適切であることを述べました。そして、広く客観的な資料を積むことにより、その子どもに独特の一つの傾向が見出され、理解への糸口が出てくるものであると申しました。

今回も、その線にそって、子どもの園の未熟な経験を通して、少し具体的なことを記してみたいと思います。

私も教師たちが、自然的観察法による個人観察や逸話記録を始めて数年になりますが、始めた当初、一同が口を揃えて申しましたことは、それまでは、目にとまらなかったような目立たない子どもに対してでも、近くなることができるということでした。その子どもの立場にたって考えてやれる、一種の共感的な感情がそこに働くのです。

子どもの方でも、「先生は僕のことだっと思ってくれるんだナ」と、その先生に対してなんとなく近づける気持を持ちます。教師の方では、問題のある子どものしつけを別にゆるめるわけではないのですが、ま

ず、問題を持ったそのままで子どもを受け入れてやれる愛情とゆとりが出てくるようになります。こうした好ましい教師と子どもの対人関係の上に、よい保育が可能となっていくのです。

このように、個人観察の記録をとることは、ある特定の子どもの理解する助けとなり、保育の上にも大きいプラスになります。さらに、記録そのものの内容について考えてみましょう。

ある研究所で、幼稚園と小学校低学年の教師たちの観察記録百余を検討したところ、総じて四つのタイプに分けることができたということです。

第一は、子どもの行動をよいとか、悪いとか、適・不適などを評価するものです。例をあげますと、

「Tはお話しの時間に大声でふまじめに話していた。自分のしたいことばかりしたが、態度は悪く、教師の言うことには耳をかさない。」

といったような種類のものです。

第二は、子どもの行動について、解釈や説明を加える説明的なものです。

「今日もAは動き通しである。成長期にあるために落着くことがむずかしいらしい」

第三は、一般的、総括的な描写をしているものです。

「Kは、このごろとくに落着かない。ほとんど動き通しである。話し合いのときも、いつもそわそわしているが、教師が話しかけるとにっこりする。」

第四は、子どもがしたり、言ったりしたことや、前後の事情、周囲の人々の会話を記し、適確な描写をしているものです。

「肌をさすような寒い風が吹いていたので、今日は外遊びをしなかった。森組は、外遊びの時間にホールで積木をした。」

省三は箱積木で船を造りはじめ、靖彦はヒル氏の積木で自動車の車庫を造った。省三の船造りの方がしだいに人員も多くなり、構成も面白くなっていく。突然、靖彦と省三の言い争う声がきこえた。靖彦はしかめつらをして「皆、省ちゃんの方へ行っちゃうんだもの、ひどいや!」「だって、僕、しょうがないんだ

よ。知らないまいに皆来ちゃうからッ!」

省三は困惑した表情で言った。」

私どものつけた記録をしらべてみますと、前記のようにはっきりと四つのタイプ

に区分することはできませんが、子どものことを思うあまりに、つい説明的な、評価的な文章があらちちに目につきます。これは、記録の技術に慣れるまでは仕方

のないことでしょう。たびたび観察の経験を重ねていううちに四つのタイプの中でも、第四番目の適確な描写が多くなってくるのが望ましいのです。(主観を入れるときは括弧を用います)

しかし、ある人は、子どものありのままの行動を記すといっても、子どもは一日中活動していて、その記録を取るのには、人手の少ない園ではことにたいへんな仕事ではないか、また、資料だけでも、ぼう大なものになってしまふと心配されるでしょう。

そこで、何を選んで記すかということが問題になってきます。初歩の段階にある教師が取り上げる題材は、どうしても教師中心のものになりやすいのです。私どもの最初の一年間の記録をひろげてみますと、子

どもの知能程度、仕事の出来ばえ、行儀、他人に対する態度、教師の感じる情緒的な面などが目立ってとり上げられております。

しかし、年を追って、発達心理学の本を共同で読み合ったり、ある年は、問題のある子どもと普通児をひとりずつ各組か選んで、年間を通して、とくにその子どもの観察を念入りにしました。そして、さらに、その子どもの製作品を見たり、家族との関係をしらべたり、知能テストをおこなったり、身体検査やさまざまなことを通して、子どもの身体的、精神的発達を知ろうとつとめました。

はじめは不慣れで、つまらない記録に時間ばかりとって疲労をおぼえましたが、次第に観察の着眼点をうまくとらえることができるようになりました。たとえば、

登園したときのようす、自由遊びのときの行動、遊びや友だちのえらびかた、創作的な仕事のやりぐあい、興味の所在、感情の表しかた、抑えかた など

保育中に子どもの顕著な行動が目につき
ますと、手早く小さいメモに二、三の要点
をかいておいて、放課後にまとめたり、あ
るいは、そのメモ用紙を一週間位はその子
どもの名前を書いた大きい封筒の中に入れ
ておいて週末に整理したりしました。ま
た、ある日は手のあいている実習生や助手
などに、ひとりについて三十分ぐらいの行
動の記録をとってもらいました。

次に一例を示しましょう。

「N先生が朝の礼拝のあとで、逃げ出し
た電気機関車」という童話を話してい
た。一同がしんと聞いて聞いているのに達
夫はたびたび口をはさんで「達ちゃんのお
爺ちゃまも電気機関車を動かしている
とき、機関車が逃げ出したの。」とはしゃ
いで言った。お話しの終りの方で、乗せ
ていた貨物がひっくりかえったというこ
ころになると「先生、先生、ね、僕のお
爺ちゃまの、ひっくりかえったの。」と
大声で言った。

.....

粘土製作のあとかたづけのとき、達夫
は片方の袖をまくし上げ、「こうすると

きれいになるよ」と言いながら、テーブ
ルをぬれたふきんでごしごし布く。

かたづけが終ると、中型の積木を始め
る。まもなく、ならべた積木の上をそろ
そろわたる。

袖をまくし上げたままである。

周囲には正弘、豊、珠代、康子たちが
いたが、達夫とは没交渉でアバウトごっ
こをしていた」

以上の記述は割合たしかに達夫の行動を
描写しています。子どもたちが動いて話し
ているようすが浮んでくるようです。

この子どもの記録には、繰返し、空想に
耽けるひとり遊びや言語が出てきました。
また、「僕？」の話題が目立ちます。私ど
もは、二、三回の記録で達夫を簡単に空想
的な子どもであると断定しようとは思いま
せんでした。あくまでも、彼への理解を深
めたいと、その自然の姿を求めました。

観察の回数は、最初は隔日でしたが、だ
んだん一、二週に一回ぐらいになりました。
数日位の間隔で二、三行程度のことも
たびたびありました。もっとも大切なこと

は、たとえ一言や二言でも、子どもたちに
ついて、一年を通しておぼえがきをとめて
いくということです。

自然観察法や逸話記録法は時間がかかる
ことや、問題が社会的適応に限られるこ
と、主観的に流れやすいことなどの欠点は
あるとしても、子どもを一人格として観察
し、あらゆる場所で現場にある先生が簡単
におこなえることが何よりの長所です。

従来あまり省みられない、この目立たな
い方法は、まだ完全に分化していない幼児
を知る上に非常に参考になることと思っ
て、今回はこの問題について終始しまし
た。こうした観察を続けていくうちに、私
たちは特定の子どものだけを理解するにとど
まらないで、一般の幼児、児童発達への理
解を深めていくことができ、ますます研究
の必要を知らされるものです。

*

*

*

*

*

*